
月 刊

MéLange

Vol.119



2017.01.22

詩と評論

月刊「Mélange」

Vol.119 2017.01.22

「月刊めらんじゅ」編集部

詩 & 俳句

桃の日 …………… 北原千代 03
 て形詠 (俳句) …………… 岩脇リーベル豊美 04
 腕を盗みし冬 (俳句) …………… 高橋雅城 05
 恋唄 …………… 富 哲世 06
 不思議な崩壊 …………… 野口裕 07
 アレッポ松は石鹼でこすると歓喜する …………… 千田草介 08
 日常の峡谷 …………… 黒田ナオ 09
 糸きれて …………… 北岡武司 09
 ふきさらし …………… 大橋愛由等 10
 天霧裂き 一千行の波 到る / ナマズをひきずって …………… 木澤 豊 11
 弱虫 / プランクトン …………… 中嶋康雄 12
 よりてかみ …………… 中堂けいこ 13
 そね …………… 高谷和幸 13
 一日の理由 (ルバイヤート風) …………… 大西隆志 14
 三つの分身 …………… 和比古 15

連載エッセイ

神戸詞あしび 108 「奄美の俳句を選句し島の生の息吹感じる」 …………… 大橋愛由等 16

編集部日より★38/2017年を迎えました。ことし生誕100年を迎える表現者が二人います。まずひとり
 は、詩人・尹東柱(1917-1945)。2月13日〈月〉に、京都・同志社大学今出川キャンパスの尹東柱詩碑前
 (ハリス理化学館近く)で第5回〈在日韓国人・日本詩人共同 尹東柱詩人追悼会〉を詩人・金里博氏と共
 同主宰します。今年は韓国からもゲストも来日。すこし規模を大きくして開催する予定です。いわば〈冬
 の詩祭〉の位置づけ。午後4時からです。二次会は京都市内で会場を借ります。／もうひとり、作家・
 島尾敏雄(1917-1986)。島尾が関係した奄美・沖縄で島尾を顕彰／検証する動きあり(沖縄の文芸誌から
 私に原稿依頼)。神戸では私が秋に〈島尾敏雄―神戸・奄美に刻印したこと〉をテーマとした語りの場を設
 ける予定です。／1月の読書会担当は和比古さん。テーマは「科学と詩と絵の境界で」。(大橋)

◆桃の日

北原千代

河原町二条のくだもの屋のパーラーでフルー
 ツサンドウィッチを食べたとき わたしは桃
 をもっていた

熟れたくだもの匂いが客の舌をしびれさせ
 あおい花びらのような熱帯魚が群れむれて
 棚に並んだ水槽から客をみおろす

フルーツサンドウィッチは 運河や農場や検
 疫所のおいがし かすかなオーガニック化
 粧水のおいがし 熱帯魚はわたしの舌のう
 ごきを見ていた

生クリイムを泡立てながら くだもの屋のお
 くさんはほおえみを浮かべた (桃をもつて
 いるのね それはとても腐りやすいのよ

棚のうえのあやうい水槽から 青いひかりを
 はらはらこぼして 熱帯魚は泳ぎつづける

ナイフで桃を削っては 柔らかそうなパンに
 挟み おくさんはほおえみながら透きとおる
 ように衰えていった

フルーツパーラー跡の 錆びた鉄骨のうえを
 鳥がかすめ飛ぶ
 水槽は空に砕けた (くだものは羽をもつてい
 るのよ

いつまでですか わたしの桃 いちばんおい
 しいところを なんでもないふうにさしだす
 桃の日

◆て形詠

岩脇リーベル豊美

畦踏んで靴音まじめに行きつ戻りつ
去年の今日清算して足らぬ師走かな
出家して読むエロに近い大哲学書
夜更かしの夜もてあまして生き残る
世界総人口人見知って怖いもの知らずになりました
余燼にて脆くなりし父の骨嚙む
小物入れ処分し輪切りトマトと柘榴で凌ぐ
言わぬが風花だから通訳しなくて大丈夫
天窓に降り積もりて雪の降り残る
どん底の石壁に新しい時計が懸けてある
夜森駆ける狐に伝えるずっとここに居て
地球外生命体が不時着して冬至の音
氷魚は河底で溺れたことだけ覚えてる

彼女死んぢやった猫踏んぢやったみたいに
鳥羽の海ジュゴンに寄り添う亀の名は？
遠ざかり遠ざかりきみのバイ菌形冬帽子
霜柱パソコン不起動の正夢に立つ
スタアダスト二度と会えない電波の向こう
時雨るや謀反にすこしだけ愛が足りない
愛と虚無わたしを時間につなぐ格助詞「と」
もう来るなもう来ませんよもう来ない活用
冬の蛾がヒントくれてふわっと墮ちる
嬰兒産んだら貝殻になつて鳩食うて
凍死する白鳥の羽根真白きまま
毛皮売り漂流先の極寒でヒトに出逢う
海あれば叫ぶヒトあり神送りて
パスポート偽造摘発つぐみ捕るように
楽しいやろね病んで妹の訊く冬吟遊
紅葉紀行の娘に倣って旅愁日記書く
樹氷凜とだれとどんな武器がほしい
初夢は初武器の鉛筆で書簡書いて

◆腕を盗みし冬

高橋雅城

◆革命篇十句

中核派真つ赤なトマトになつちやいな
革マル派赤ピーマンが出家する
モツ食らう日本赤軍唐辛子
胡麻を煎るほどの笑いや全学連
全共闘みちに銀杏つぶれおり
社青同解放派ゆき曼珠沙華
凶作の果てに第四インターで
秋燈の反帝学評意味知らず
民青や赤白黄色鬼ごっこ
涼新た連合赤軍風呂に入る

◆冬雑詠十五句

暮易し人売人浚も消ゆる
晩年や思いごとへと隙間風
盲汁じるところに固きもの
青春は盲汁なり箸惑う
マント着て飛べず祥月命日に
霜の墓霜は溶けざり世の終わり
閻鍋やごろり横たふ熱の塊
絨毯で飛べるはずなり幾何公理
机上には髑髏の模型冬の夜
むささびと伴に飛び去る幼女かな
マネキンの腕を盗みし冬の暮
梟や宵には黙す畏まり
木菟が啼くイデオロギーを論ずころ
白足袋の急ぐ廊下や朝まだき
口中の火傷うれしき牡蠣フライ

◆詩人が好みそうだが俳人が詠んではいけない
最悪句二句

煮凝や涙は涸れて雲仰ぐ
木枯も吹けば出自を忘るなり

◆恋唄

富哲世

土塀のくずれた屋根の辺りに
カナヘビがつづく
水の上がる
河下から三番目の橋の角を曲がると
逃げる紙芝居屋が小雨降る小僧の敷石も震えている橋の
島の端で
馬の首を抜いた

豆腐屋の親父
尋常げな顔をして
鬱々と赤毛の驢馬のことを思案する
ロバは船に似て頭がありしつぽがある
それが府に落ちない
それはまえ後ろにあり
あたまにしつぽが生えているわけではない猫は円くなって眠る
くせに
煮えたぎる地獄の釜の前でも
粉まみれになって

傀儡が蒼い顔で欄干に俯く
河豚の棲むこの河の巷

だんだんと
手を挙げる
水平線
ごく自然に
だれにも気づかれないうちに
わたしだから
ゆつくり
わたしだから
「かじやまとうむかーちぱい」
コロニーの夏のはみごと

※「風は 順風 夏至南風」

◆不思議な崩壊

野口裕

音が連なり言葉となる
糊の雲をともないながら
雲を雲にからみつかせ
ようやく絞り出した
鉱脈をうがつ言葉ひとつ
音になった言葉の裏に
音にならない言葉以前がしがみつく

けっして音にならない言葉たち
ぞんざいな手のひらよ
糊だらけの指先を乗せて
風に乾かせば
ぼろつと取れる不純物
冬の夕陽に透けるねこじゃらしほどの
清澄さ
望むべくもない
陽気な音がわずかな雲纏わらせ
固い不純物を
石英・長石・雲母・輝石・橄欖石と並べてゆけば
がらがらと崩れてゆくよ
うがったはずの鋭い孔が

◆アレツポ松は石鹼でこすると歓喜する

千田草介

岩という名の男が湖でりしていたときに預言者に勧誘された昔を逆さ十字架を負って思い出しつつ金の鎖につなされた二百年後の女王や千年後の十字を掲げたならず者の大軍や二千年後に空から降る爆裂する物体の幻影を見たはずだという三人の賢者の合議体がバツシャルウラジミールバラクの三角錐に転生したという紙幣の中に棲む目玉の親父の託宣により妖怪変化百鬼夜行し過去現在未来は逆断層をおこし因果は陰画となつて牛は虎を食べ聖者は虚言のエンサイクロペディアを編み無用の減数分裂は地を覆い尽くしてガレキに花を咲かせましようと売りの国際販売隊が地には平和をとという宣伝文句を印刷した紙風船をジェット気流にのせてタックスヘイブンの旦那衆を醜聞をネタに恐喝する証拠文書はアレクサンドリア図書館に収蔵されてあつたはずなのだがカエサルがやつてきたときに焼尽して選ばれた者にしかアクセスできないアカシヤ年代記に虚空蔵されているばかりなのだから洗濯するにも垂訓を得るため山へ行くしかなくそこで神により石に刻まれた碑文は百億枚の刷り物にされて人類の脳細胞をあまねく占拠する。

◆日常の峡谷

黒田ナオ

日曜日の夕暮れは

手が伸びる

足が伸びる

体がぺたんと広がって

長い長い一本の地平線となる

するとその向こうから

ぼこりぼこり

馬に乗ったカウボーイがやって来る

テンガロンハットをかぶって

ブーツを履いた

鼻の高いカウボーイ

もうすぐ西部劇が始まるのだ

テレビのスイッチが入る

お茶の間が

ふわりと落ちてきた

わたしは体を

風呂敷みたいにくるんと包んで

西部劇と一緒に

旅に出る

遙か彼方にあるという

赤茶けた幻の谷をめざし

帰らない

帰れない

誰かが名前を呼んでいる

昏い野良犬の遠吠えが

宙いつばいに響きわたり

とてつもなく大きな足跡が

ぼつんとひとつ

残される

◆糸きれて

北岡武司

音道ばたにススキぽつぽつ

世にいて世のいつさいと絶縁し

すきとおつた髪をきれいにとのえ

午後の光に上衣をにぶくさらす

丁寧ひかえめにお辞儀するほそい腰

立ちつゞけときをまちときをへる

かぜのいうまゝお辞儀してはかおをあげ

負いめを赦してくださいませと祈る

どんなかぜにもそむくまいと心にきめ

くびれた湾に日の鏡ができれば

そちらをむいてお辞儀し天をあおぐ
あおぎ頭をさげかなたをみあげる

むれてある孤独で寂寥きわだち

ひとりみの意識するどくて琴線しまり

頭をさげてはあげそのときをまつ

しずかな心で迎えられますように

雲は日没まえの太陽にそまり

天王天衆のひかり世にさしきたり

カオジロガンの編隊はつらなる

そらはいろこくふかくたかく

髪はこがねいろにかがやき初め

頭上をゆうばえの朱色がおうう

たそがれの協奏曲にふるえ

琴線は羽音をたて、切れた

天のひとたちにかこまれ呆け放下て

ゆうぞらの荘厳にみたされるススキよ

◆ふきぢらし

大橋愛由等

とどまつていて
これから
だまろうとして
かおだけは
こつちを
むくそぶりをして
ふきぢらしの
あの
がけのうえで
てを
こくうに
かぎし
みず
とだけ
いったあと
みず
とまた
ぼくを
みすえて
くぐもつて

これから
さかなを
じつと
みているだけと
おおきなめで
かなしくはないけど
いとおしくもないけど
ぼくに
つたえたあと
うまれた
imi
を
ぼくも
てを
こくうに
かぎし
かぜに
とうせんばされないよう
とりたちに
こつかれないうよう
ふゆのはなに
たべられないよう
imi
を
ゆつくり
ぼけつとに
いれて
にぎりしめ

あたため
ここを
さろうとして
ふりむくと
まだ
さかなを
みていて
やはり
これから
だまろうと
していて
もう
imi
しか
ぼくの
てに
のせようと
せず
ひかりの
もとに
かえるよう
うながされ
がけつぷちから
あゆみだし
ふゆのはなを
ねんいりに
くだく

◆天霧裂き

一千行の波 到る

木澤 豊

白い浜に十数頭 黒い頭が並んで
いるかは静かに眠っているようだ
藍いろの海きらきら
長柄の刃物が横つ腹をすべり
白い浜が赤く染まり 海に広がっていく
砂の粒子をぬって血がしみ
清冽な風が吹く

漁撈資料館には いるかの一片の骨もない
浮世絵のかたちの富士も
うつつら うそつぽい
なんか不吉な圏外に出ってしまったようで
何も書いていない遺書を手渡されたよう
日経ち 日立ちて三万日なんて
わが骨一片もない
右の縞目の果てにきたんだな

◆ナマズをひきずつて

木澤 豊

今夜 猟師は 肉の煮付けで晩飯だ
家族は肉をむさぼるだろう
男は焼酎を飲むだろう
これが食欲ちゅうもんだ
木の漁具は丸くおだやかに古びている
男たちの呼び合う声は鋭く明るい
そんな日があったな
潮の奔りがきこえたな
船小屋の浜はホテルなんか建ち
貝殻もフナムシも木っ端もさび釘も匂いも
ない地面を歩いて

書くとき みんな通り過ぎてしまふ
そいつは 朝昼夜 腕をのぞきにやってくるが
空っぽで。それでも満足して ゆつくり立ち去っていく
《指呼》 指で呼べる距離 指 とそれとの
隙間 住めない場所に生息しているそれ
話すのは ウミの彼方 ミュについて か
瞑目 鳥の目のひとつひとつが その黒い
粒が みている隙間は 私の世界の欠けた
部分と重なっている

ガラスの向こう 灰色の衣服で身を包む女
が海を見ている 湾岸が弓形に張って 海
の光が労働者のなかを照らし出す 風がそ
の襷を消すと 部屋から出て行くわたしが
みえる
部屋が 外になって 外には傷だらけのデ
スク、椅子、ペン 燃える錆びたストーブ
煙と灰のおいがただよ 一人前の食事が
置いてあって とどまれない人も座って
いるが

ガード下の部屋に フィラメント電球が点
いて そこで首のないわたしが 辛い漬け
物を載せたパンをかじって 水を飲んでい
た
ひたひた 波おと
あいつが どでかいナマズを引きずってい
く夢を見たぜ
ナマズつて 海にいるのか

◆よりてかみ

中堂けいこ

頭がちりぢりになる よりてかみよりてかみ
ああ濁音がほしいと雨乞いをするが わたしは
動物を四角にたたみ箱にいれねばならない 雨
のしたたるよりてかみの納屋はばあちゃんの桐
箆筒が二棹たてこんでそのすき間に箱をつみあ
げる ああ濁音がほしい 動く物にすぎないと
わたしたちの夕食に供される動く物は臓腑にた
どりつくのだがことごとくおしなべて箱のかた
ちに押入れられる 納屋の長持の引き戸をひら
くと四角にたたまれたばあちゃんのばあちゃん
がひざをかかえて笑っている そこいらに濁音
がふぎだし なつかしいかっつての動く物たちよ
そこにおすわり わたしのことばの鏡となり光
をてらしてほしい ねがいのはしから洗われて
うれしいとかなしいを手でちぎりながら ずつ
とよりてかみの動物を四角にたたみつけてい
るようにおもわれる

◆そね

高谷和幸

そねとそのそね「がもう夢をみなくなつた」。間隔
維持のチカラでたまもたれてあるならばそれは
そのと言われるそねの海と陸との陰画のおとが
いにさそいこまれる核の磁場。あなたは墨絵を流
したように躰をくねらせている。あなたは翼で飛
び、そのくびれから解放された位置を、視界のな
かに白黒のピンと次なるピンでとどめようとす
る。灰色の海（ここが生者の塩っ辛い水）があな
たの真水に逆流するそのここ（死者があろうこと
か欣喜すること地名になつた）。海に続く長い
あなたの土塁は、塩味が残つた陶器（すえもの）の
かけらが発酵してできたもの。そねとそのそね。
植物界とは真逆にカラダの根から漏れ出るひか
りをおさえているのはあなたの「て」のそれで。そ
の「て」が隠そうとするのはおとがいを閉じよう
とするそねの毛曾呂（もそろ）？。「て」は男と女
のなにを担いできたのだろう。「やつと夢を見な
くてもよくなつた」そねとそのそね。「そね」と呼
ばれた車内アナウンスの声が、鉄橋の低い音階の
四拍子にゆすられて、通り過ぎるまであと少しわ
たしをとどめようとする。

◆弱虫

中嶋 康雄

弱虫だからと泣き叫んでも
顧みられることもない
弱虫は損をする
損をしたくないのは
誰もが同じで
弱虫なぶんだけ損をする
弱虫でさえなければよいのだと
蠅の脳でもわかるだろうと
言われるけれど
相も変わらず弱虫で
寒空の下を唯々歩く
缶コーヒの空き缶が
飲み残しを垂れ流しながら
転がっている
腹を空かした野良犬も嘗めるのを厭がる
つまらない臭いを残し
月もない真夜中にいつまでも転がっている
これでもう終わりだと
思いながら転がるうちに
周りが勝手に消え失せている
相変わらずの飲み残しと
相変わらずのへこみを
空っぽにとりあえず取り込んで
独り損をし続けるしか仕方ない
寒いなあ
穴でも空いているのだろうか

穴は穴でも

弱虫の穴は埋めようもない
腹減つたなあ
地面にパンが落ちていいるなら
食べたいが
空き缶だから入れる口もない
出る口からは
冷えきつた飲み残しがまだ漏れる

◆プランクトン

中嶋 康雄

さまよう水道管の最果てが
もう消えているかもしれない
一匹の亡者が
影だけでも残してくれれば
そこは終点になるだろうか
寝そべる横につまらないものが
すべりこんでくるかもしれない
もう生き残れないプランクトンが
中身をほどこいているかもしれず
迂闊には近寄れない
地下のチョコレート菓子工場が
祝祭を待っている
祝祭はもう何年も開かれていない
ムードだけでも十分だということ

もうお金がないというのが言い分だ

プランクトンが蠢いているし
よくみるとじつとしていいるヤツもいる
相対的なチューリップが今年も咲いた
チョコレート菓子を売る店が
いつもどおりそこにあると
それだけで安心してしま
ここ数年店内に入ったことすらない
テレビ番組で紹介される
繁盛はしているという
人影はまばらでも
ネット通販による売り上げがあるという
プランクトンがネット通販に侵入し
勝手に増えているという
手元に届いたチョコレート菓子は
プランクトンに塗れている
最も大切なことは
心地よいこと
少量の毒素であつても
心地よければそれでいい
構成する元素がどんなにおぞましくても
心地よければそれでいい
それが愛おしいプランクトンから
排泄されるものであるならば
なおさら意にはかきさない
どぶの中で息をする
鼻がないから臭くない
盗みとればそれでいい
チョコレート菓子がトラックで出荷され
リボンを巻かれて届いてしまう
プランクトンしかない家にも

◆一日の理由（ルバイヤート風）

大西隆志

13

一度だけの光景なのか、と空を見ていたのに
外れ馬券が朔風に煽られていた先に
聖なる日のポケットにヤニ臭い手を突っこ
んでいる鬼
書物の蟹が背負っていくのは言い伝えて造
られた国

14

崩れていく午後のいつときに書店があくび
をはじめて
あふれる光のなかで自転車のライトの点
滅、ブレーキをかけた左手
転びそうにやってきた馬の背でリックサッ
クに糧を差していて
崩れた身にしみるのは真つ暗闇に吹き抜け
ていく世界の涯

15

一人の知識の儂さを認めるのも
口に含んでいるのがこちらか、あちらかに
漂う八雲
響くのは立ったままに眠るとされる風のカモ
ひも、ほどげ、故郷に帰った真つ二つに割れ
た居場所にも

16

一番安いカップ麺、一番安いバナナ、一番安
い死よ
夜の一番深い淵、暗闇を照らす孤独な外灯
の下にひろがる我が世
鳥小屋には乾燥した白菜の屑、佳人の乾布
摩擦で迎える夜
電柱が去り、車掌が乗る列車だけが走り去
っていったよ

17

机の端に丁寧に積み置かれた文庫本八冊
故人の枕頭の書は紙で出来た家に入る靴
夕日の先端に沈むのは岬からの放擲の熱
ある晴れた日とは傍らを流れる川の中津

18

不快を誘うのは交差するわたしたちの顔の
いらだちのわたしたちの声、反響するわた
したちの持物
ステータスは砦になり、わたしたちの野の
おいをまといながらに、野蛮に、野卑に、
手に斧

◆三つの分身

和比古

一期一会というが
出会いとは不思議なものである
仮そめの友人となることもあれば
一生付き合うこともある
神様の仕事といえど単純だが
実際はそんなものではない
何らかの力が作用しているであろう
親しく付き合える場合もあれば
けんかばかりしていることもある
組織で上下関係の場合もあり
ハラスメントに至ることもある

目玉男に出会ってよかった
表情は目玉全身に現われる
ウインクをしたら
目一杯のよろこびを見せてくれた

互いに同じ道を歩いてきた友として
苦しさや楽しさを共有してきた

道化師は一体何ものだろう
影のようにいつも自分の傍にいる
そして同じような動きをしている
一見、別の人格に見えるが
人生の喜怒哀楽は同じように感じている
それぞれ問題もなく行動している

目玉男と道化師の見かけは違うが

つまるところ
自分の化身かもしれない
これからも彼らと
いろいろな意味でつながっていきたい
これが生きるということ

目玉男の思い

目玉男は表情が体全体に現われる
思っていることが直接伝わってしまう
隠そうとしても無理な話だ
逆にそれにより
人間たちと仲良くしてきたし
仲間としても認められてきた
百面相だつてできる

優しい目玉にもなり
敵しい姿にも変身できる
すべては目玉男の思いのまま

人間たちの争いには
目玉を閉じざるを得ない
いつも清々しい表情で
瞳全部を使って生きていたい

道化師の考え

道化師は表情を容易に変えられるため
自らの気持ちを見せることはない
器用に振舞いながら
人間たちと巧みに付き合ってきた
逆にすべての行動の裏を見破ってきた
それでもこれまでの長かった道程を
何とか歩んできたのだろう

自分は人間と言いながら
人間らしくない人間だと思ふ
この道化師の方に似ているかもしれない
道化師の気持ちも理解できる
だから付き合ってたのだ
楽しいことも
苦しいことも

うた 神戸詞あしび

108-2017.01.22 大橋愛由等



徳之島での句会の様子

誰に頼まれたわけでもないのに、俳句の選者をしている。奄美群島で発行されている日刊紙・南海日日新聞には、毎月末になると三回にわたって「なんかいい文芸」という欄が掲載されている。四つの俳句グループから作品が寄せられていて、其の中から五句を選句している。バランス感覚をいかしてひとつのグループから必ず一句を選び、あと一句は随意に句を選び出している。

この選句作業は、二〇一五年一〇月からはじめている。去年一二月分ではちょうど一五回となった。選句した句とその講評(選句理由とその句の魅力や、句の文化的背景は、「島唄生まれ」という私のブログで紹介している。それを二〇一七年奄美ふゆ旅のために、印刷して冊子にまとめたのである。

この選句作業は一年を通じて、奄美の俳人たちが、どのように島の季節のうつろいを表現しているのかを知りたいために始めたのである。というのも、奄美は本土と気候が違い、本土の季語がほとんど使えないために、奄美独自で季語・季節を活用していかなくてはいけない。

奄美の俳句を選句し 島の生の息吹を感じる

つまり奄美には本土のようにはっきりした四季の区別がなく、永い夏とあつたないような春と紅葉の見られない秋。冬も雪は百年に一度ほどしか観測されないような気候であるからどうしても自分たちで季語・季節を創出していかなくてはいけないのである。

その創意工夫のさまが俳句という文芸を考える時に思考の素材となるのである。つまり俳句は、もともと京・大坂の気候風土をもとに形成されてきた季語を使うことを前提としているものの、装置としては日本という国の領域のどこでも使えてしかるべきという了解のもとに措定されている文芸なのである。このきわめて国民国家的なありように対して、「亜・日本」というべき奄美・沖縄(梅雨のない北海道)ではこうした暗黙の規範にあらがうまでもなく、独自の季語・季節を使うことで知らず知らずのうちに俳句という文芸のありように対して差異化を図っているのである。

季語・季節とは、ある特定のまとまりのあるひとたちの(俳句では結社がそれにあたる)が、そのひとたちの了解のもと(或いは結社の主宰者の先導のもと)で新たな季語・季節が採用されるかどうか決定される。それがそのまとまりのあるグループのひとたち以外に遡及するかどうかは、その新しい季語・季節がどれだけ、ひとつのまとまりのある地域のひとたち(ここでは奄美のシマンチュ)が共感するかによって決定される。

こうした作業を経てあらたに生まれていく奄美の季語・季節はあり、俳人ばかりではなく、俳句の読者たちにも共感が広がっている。すでに奄美・沖縄で使われていた季語・季節はいつくか存在し、独自の歳時記も何冊か出版されている。

わたしの選句作業はようやく一年を経過したばかりで、これから季節のうつろいと共に、同じ季節に同じ季語がどのように使われているのかどうか、あるいはあらたな季語・季節が創出・定着していくのかを、時系列に追っていききたい。こうした文学営為は島に生きる奄美のひとたちの生の息吹そのものであり、奄美というひとつの生き物が生み出す言葉の結晶ではないかと想っている。

詩と評論
月刊「Mélange」Vol.119
神戸

2017年01月22日 通巻119号
発行所/月刊「Mélange」編集部
〒650-0012 神戸市中央区北長狭通1-7-1 2F
編集・発行人/大橋愛由等(「Mélange」同人)
maroad66454@gmail.com
定価600円(税別)